

平成29年度第1回埼玉県総合教育会議議事録

1 開会、閉会の年月日及び時刻

平成29年7月20日（木） 午後4時開会

午後5時6分閉会

2 会議開催の場所

知事公館 大会議室

3 出席した会議の構成員の氏名

○上田清司知事

○埼玉県教育委員会

小松弥生教育長、藤崎育子委員、志賀周子委員、門井由之委員、上條正仁委員、
後藤素彦委員

4 構成員以外の出席した者の氏名

○知事部局の出席者

加藤和男総合調整幹

中川典之県民生活部副部長、岩崎寿美子青少年課長

知久清志福祉部副部長、加藤誠社会福祉課長、西村朗こども安全課長

野本真秘書課主幹、仙場正宏報道長付主事

○警察本部の出席者

齋藤正士少年課長、唐仁原哲也少年課係長

○教育局の出席者

小島康雄副教育長、

柚木博教育総務部長、古川治夫県立学校部長、松本浩市町村支援部長、

関口睦市町村支援部副部長、古垣玲総務課長、岡部年男教育政策課長、

羽田邦弘県立学校部参事兼高校教育指導課長、小谷野幸也生徒指導課長、

阿部正浩総務課報道幹、飯田徹教育政策課副課長、案浦久仁子教育政策課副課長、

中沢政人財務課副課長、秋葉淳一生徒指導課副課長、古澤健一教育政策課主幹

5 会議に付議した事項

東松山市地内発生少年死亡事件に係る検証結果とその対応について

6 発言の趣旨及び発言者の氏名

開 会

○小松教育長 ただいまから平成29年度第1回埼玉県総合教育会議を開催いたします。

本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づいて設置されたものであり、知事と教育委員会が協議を行う会議でございます。

それでは、議事の進行につきまして、上田知事をお願いいたします。

議 事

東松山市地内発生少年死亡事件に係る検証結果とその対応について

○上田知事 はい、今日の会議は、小松教育長を迎えて初めての総合教育会議ということでもあります。もう少し前向きな明るい話題も展開したいところですが、東松山市で1年前に16歳の少年が、同じような年齢の人たちに暴行を受けて死亡するという痛ましい事件が起きました。その事件の検証結果について、その結果と対応について意見交換をしていきたいと思っています。

物事は簡単ではありますが、一方ではそれを丁寧に追いかけていくと、幾つもの伏線があったりして、それが重なって、結果的には不幸な水流というか、流れの中にはまってしまふということがあるのかなと思います。報告書そのものを私も詳しくは読んでおりません。資料の説明を教育長からお願いしながら、その後協議を行いたいと思いますので、よろしくをお願いします。

○小松教育長 はい、資料はA3横長の概要を御覧ください。

まず、事件の概要であります。事件の概要は、平成28年8月23日、県立高校を中途退学した少年の遺体が発見され、その後、少年5名、このうち2名が中退者、そして3名が中学3年生ですけれども、その5名が傷害致死の疑いで逮捕されたということでございます。

す。

この事件を受け、埼玉県教育委員会は、川越市、東松山市の両教育委員会とで合同の検証委員会を同年9月に立ち上げました。

検証委員会では、小学校、中学校、高校、それぞれの段階でどのような指導や対策が求められたのか、学校における事件の再発防止策が検討されました。

7回にわたる協議を行いまして、今年3月に報告書がまとめられました。この報告書の中では、繰り返す問題行動には必ず背景があり、多くの場合、子供の置かれた生育環境と発達段階の課題が存在しているとし、成長過程ごとに課題を取り上げ、集約・整理をしました。

そして、少年たちをこのような事件の被害者にも、加害者にもさせないため、今後どのような指導や対策を行うべきかについて大きく3つの観点、「非行・問題行動への対応」、「高校中退への対応」、「非行・問題行動への未然防止対応」として検証と考察を進めたものです。

主な考察については資料にあるとおりでございます。

では次に、資料の2枚目を御覧いただきたいと思えます。

2枚目には、今回、協議をしていただきたい論点をお示しさせていただいております。

1つ目は、関係機関と連携した家庭への支援でございます。検証では、「学校は、問題行動に対して積極的に保護者との連携に努めているが、家庭の協力が得られないケースが多く、なかには子供の生育にとって望ましくない状態の家庭もある。学校と家庭との関係が悪化すると、非行の増長や不登校、中退のリスクを増大させてしまう。」とされており、困難な課題を抱える家庭への支援を進めるに当たって、学校と児相と福祉機関との連携が不可欠であるけれども、日頃からどんなつながりをつくっていくべきか。

それから、問題行動の予兆は大抵小学校段階から見られているので、問題行動の未然防止の観点から、小学校段階からどのように取り組むべきか、という点でございます。

2つ目ですけれども、地域の力による非行問題行動への対応でございます。

検証では、「児童生徒の急激な変化には、背景として生活環境に変化があることが多く、表出している児童生徒の変化のみを捉えた指導では期待した効果が難しいため、家庭環境を把握できる関係機関と連携をして必要な情報収集に努め、的確な見立てを行う必要がある。学校と関係機関との連携は十分とはいえない状況であり、積極的な連携への努力は双方に求められた。」とされております。

そのため、学校と関係機関との情報共有をどのように図っていくのか、その際、個人情報の扱いについても注意が必要です。

非行防止のために、地域にある様々な力をどのようにつなげ、有効なものにしていくのか、そういう論点でございます。

3つ目は児童生徒の居場所づくりでございます。

検証では、「生徒の中には家庭を居場所としていない者もあり、中退すると、学校にも家庭にも居場所がなくなってしまう、非行傾向のある児童生徒は、知り合いの所属する非行グループの中に居場所を求めるようになる。中途退学した生徒は、社会性や人間関係スキルが十分には身に付いておらず、高校以外には当該生徒を受け入れ、社会につないでいく居場所がなかった。」とされております。

そのため、非行傾向のある児童生徒が学校に居場所を見つけ、学習を続けるための仕組みをどのように構築していくのか、居場所を見つけられない児童生徒に対してどのように対応していくのかということが課題になっております。

これらの3つの論点を中心に御意見を頂戴したいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

○上田知事 ありがとうございます。

御意見を下さいといってもなかなか中途半端になってしまいますので。原則論でいえば、家庭で居場所がある、おさまりがついて、落ち着く関係があればそれで救われるわけですが、それがなくても、私に言わせると、学校ですばらしい教師に巡り合って、教師の大きな愛情だとか指導力に包まれて救われる可能性もあると思います。よしんばそれがなくても、地域そのものが全体の家庭代わりみたいな包括的な大きな空間をもって手を差し伸べたり、暖かい愛情で包まれるようなものがあれば、それで救われる。この3つがあればもう全く問題ない、あるいはこの3つのうち2つでもあれば、まず大きく崩れることはないと思っておりますが、この3つともはずれたときに、正に被害者と少年A、B、C、D、Eの存在が出てくるのではないかなと思います。したがって、今、私たちは埼玉県の一部中学校もございしますが、高校のところを担当しておりますので、高校の場面、学校の場面でどうそうした居場所づくりをするかというところに1つはポイントを置いて議論を進めていきたいと思っております。

2つ目は、なかなか家庭のところに入り込むことができないのですが、入り込めなくても、どういう接点の持ち方を持てば、よりましな、子供にとって、青少年にとっての居

場所づくりにつながるかということ論点にしたいと思います。

3つ目は、正に先般、「街の応援団」をつくっていただいたところですが、正に地域の力をどれだけ構築できるか、あるいは、できあがっているものをどれだけもっとふくらみを持たせられたり、より機能的に教育の方面に助けていただけるかということ。ない場合には何とかそれを構築していくということ。

この3つに絞って議論を進めさせていただければありがたいと思いますが、特に論点についての整理という形、今みたいな形の整理というのではないと思いますので、当面、高校を運営する立場から、現在の高校の中で何か欠けているものがあるのかないのか、あるいは補強すべきものが何なのかとか、こういったところに議論を進めさせていただければと思います。大体おおむね15分ぐらい時間をかけていきたいと思いますので、御意見を開陳していただければと思います。どうぞお願いします。

○藤崎委員 児童生徒の居場所づくりについてなんです、子供たちにとって居場所となるということは、まずそこに自分を受け入れてくれる、あるいは待っていてくれる先生がいるかということだと思います。最近感じることは、教師の感度をもっと上げていかなければならないのではないかとということです。

例えば今回、学校だけではもう限界がある、連携が大事だということは皆が共通した理解をしているところだと思うのですが、でも担任の教員が、その子供の置かれている状況や、その子の気持ちを理解できるような感度を持っていなければ、司法につなげることも、福祉につなげることも難しいと思うのです。

それにおいて、学校の先生方が、例えばスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを活用することは大事だと思いますが、やはり先生と生徒のつながりが一番強くなければ。スクールカウンセラーは、あくまでもその学校を支援する存在だと思います。そのためにやはり教師の感度を上げる研修、研修も実は教育委員から要望を強く出しまして、生徒指導課で教員を対象に、今回の事件の報告書を読み込むという非常に中身の濃い研修をしていただきました。こういった研修ももちろんですが、それ以外にも先生方がもっと自ら感動したり、あるいは高校の教育をどう考えるかという2点において、いい話がありました。

1点目は、日高高校で、さいたま市の教育委員でもあるパラリンピアンの方の平澤奈古委員に講演を生徒向けにさせていただいたのですが、教師からも非常に熱心な質問が出まして、例えば20年間競技生活を続けるに当たって、くじけそうなきにどうしているかという質

間。やはり教員も苦しいようなことを思いながら、そういった声をそういったアスリートの講演を通していろいろ感じていたのではないかと思います。

そして2点目は、昨日、白岡高校に視察に行かせていただいたのですが、白岡高校では、赤点を取ったあとには補習をその生徒たちにするわけですが、学年体制もしっかりしていきまして、まるで学校が午後もう1回始まるかのように補習を行う、生徒たちも赤点を取ったらもう終わりだというふうに思わず、もう1回先生と勉強し直す、こういう試みというのは他のところでもなされていると思いますが、当たり前のことを当たり前に実践しているということで非常にいいのではないかと思います。

以上です。

○上田知事 ありがとうございます。

私も小学校5、6年の担任の先生がとても優れた先生で、半分ぐらいを不合格にする先生でございまして、単元が終わるごとに国語に関しては最小限度の漢字の書き取りと読みをさせて、単元ごとに算数のテストをさせて、20題ぐらいの問題を解くので、1回目が80点で、2回目は90点以上でないと帰れない。半分ぐらいは大体80点以下なので、半分が残ってしまうので残ることが恥ずかしくないです。仲間がみんないる、半分ぐらいいる。今度は90点を取らなくてはいけないので、再度先生が簡単に説明してくれて、そのときだけ必死になって聞くので、みんな頭に入れて、今度は90点以上をほとんどが取れる。3、4人ぐらい取れなかった子だけが今度は残って、その3、4人だけに集中して先生が教えて。僕らはその後の3、4人がどうなったか、薄情なもので、さっさと遊びに行くというような態度をとっていたのですけれども、やはり同じそういう形で赤点を取ったら補習ということで、赤点が恥ずかしくないような体制づくりをしていただければ効果が高いと思います。

それから、やはり学校だけではもうなかなか対応できないという考え方を持っていること自体が多少敗北主義みたいなのところもありますので、何とか自分たちの手で解決する、自分たちの手で自己完結的に片付けるというよりも、最初のつかみは自分たちだという認識を持つことが大事ではないかなと思います。何かそういったところの力点をポイントにするようなことを県の教育委員会の方にもしていただけたらと。まず一義的には自分たちで頑張ろうと、そういう姿勢がないところでそれぞれ役割分担、機能分担といっているうちに全部空席になってしまうというようなことになりかねないので、御意見はとていい点ではないかなと思います。

それ以外に何か御意見ありますか。

○門井委員 今回の検証の報告書は、非常にいろんな点で示唆に富んでいるなという感じがします。その中で居場所づくりについても、その役割を担うのは学校が非常に大事だという御指摘がありました。ただ、居場所づくりというと、そういう子供たちが集って学校にいればいいみたいな、居心地がいいみたいな、何か友達がいて楽しいねみたいなところをつい思ってしまうのですけれども、やはり学校というのは学びの場なんだと思うのです。

先般、この春に新たに高校の校長先生になられた方々とお話をする機会がありました。そうしましたら、学び直しの問題で、九九から始めなくてはならない子が高校に入ってきているということでした。小学校で本来やるべきものをです。実際99%が高校に進学する今の現状からすると、そういった学生が当然存在するだろうと思います。ですから、極論を言えば、そういった子供たちが学び直しをして自信を持つ、そういった子供たちが集えるような学校が必要なのではないかなという感じがしています。学ぶ楽しさというのを味わってもらって、その上で学校は学びの場であって、かつ居場所であるというのが理想ではなかろうかなと思っています。

○上田知事 それは特別な学校ではなくて、学校の中にそういう学級があるとか、コーナーがあるとか、それでもいいわけですね。

○門井委員 そうです。それでもいいですし、極端に言えばそういう学校をつくってしまうとか、要するにみんなで学ぼうよという学校、それが果たしていいのかどうかというのは、私も正直言って分かりませんが。

○上田知事 その学校に行くこと自体でレッテルを貼られるようなきらいがあったりしますね。そこまで開き直すパワーを持っていればいいのですけれども、それがちょっと心配なところですが。

○後藤委員 この報告書を見させていただいて、この被害者の子も、加害者の子も、必ず小学校時代に輝く場があったのだな、光輝いているときがあったのだなというのを読みとらせていただいたのですけれども、例えば運動会で1等賞を取るとか、サッカーで活躍ができたとか、そういったところをちゃんと褒めて認めてあげるということをもっともっと小学校低学年、もしくは小学生のときにしてあげることによって彼らの学校での居場所とすることができるのではないかと改めて感じました。

私が中学校、高校時代なんかを振り返ってみても、勉強はできないけれどもサッカーだったらあいつが一番得意ですごいな、あいつが一番足が速いなと、ちゃんと学校では、そ

の子たちが一番輝ける場所がありましたし、一番の居場所というのがあったのです。それも先生たちが勉強できなくても先ほど話のあったとおりとちゃんと補講して、先生も向き合っていてあげて、その先生をフォローする先生がいたりとか、そういう体制が私はすごく大事な環境なんではないかなと思います。先生が向き合うことは大切なのもかもしれないし、居場所づくりも大事なんですけども、先生を1人にしない、先生を先生がお互いにフォローアップしてあげる体制を学校の中でもつくってあげることは大切なんではないかなという感じがします。

○上田知事 学校は基本的に勉強するところですので、そっちで破れると自信をなくしていきますので、違う価値観があることをどれだけ学ばせられるかどうか、違う価値観のあることをよく教えられるかどうかというのにやはりかかっていますよね。

○上條委員 正に知事がおっしゃったようなところは非常に重要だと思ひまして、学校というのは基本的に勉強して、ある意味では成績をつけられてしまうところというような感覚というのがあるわけですけども、今回のこの事件の背景を考えていくと、学ぶことというところまで行き着いていない、人として置かれている状況というのをどれだけ知ってあげられたのかなというところというのを、学校や教師がどれだけ把握できていたのかなとか、あるいは想像力を持って接することができたのかな、情報収集だとか、想像力だとかというところがどれだけできていたのかなというのを感じざるを得ないですね。

この中にもいわれていますけれども、小、中、高で情報の共有、伝達というのが正しく行われて、今、後藤委員から話があったように、それを対応するのに1人の先生、1人の教師に過度に依存させない、チームで対応していったらいい。

もう1つは、姿勢としては、摘発的な姿勢ではなくて、教育的というか、もうちょっと言ってしまうと養育的というか、その養育的な姿勢をベースにした地域とのネットワークみたいなものを構築していくということがとても大切なのかなというふうに感じました。ただ、そのときに、先ほど知事もおっしゃったように、では誰がリーダーシップをとるのか、核となるリーダーシップを誰がとるのかということは、これはなかなかケース・バイ・ケースだったり、置かれた状況によっては変わってくる、深刻度だとかいろんなものの中で変わってくるかもしれないですけども、その部分も含めて、やはりネットワークの中できちんと理解を共有していくということが早い段階で防ぐ、子供をつくっていくという意味では重要なのかなということはこの報告を見て感じました。

○上田知事 上條委員の言葉でヒントになったのですが、例えば小学校から中学校に上が

るときに一旦情報が途絶えがちではないですか。例えば小学校1年から6年までは同じ学校にいて、多少出入りがあるって、情報が少し交差していくので、先生たちも子供のことを多少は把握しやすい面もあるのですが、中学1年のときにはわからない。もし小学校の6年間の間に100mでは一番速い子だ、そういうデータが担任に伝わって、30人なら30人の子供たちの中で「すごいんだってな、運動会で君が一番だって」という声をかけられれば、その子にとっては違うかもしれませんね。

○上條委員 だから摘発的な姿勢ではないということ。こいつは問題児だというようなことが伝達されるだけではなくて、要するに人として光と影というのは必ずあるわけなんで、その光と影の両面がきちんと伝わっていくような情報の伝達というのができて、それが養育的、教育的な姿勢の中に使われていく。それが学校だけでなく、地域のスポーツ少年団とかいろいろ出ていますけれども、地域のネットワークの中にうまく、個人情報の問題があって最近はどうもさういので、その辺が難しいのですけれども、家庭環境なんかも含めて考えますと、その辺はやり方を工夫する必要があるなと思いますけれども、そういうアプローチというのはとても必要なんではないかなと思います。

○上田知事 今のも相当ヒントがあるかもしれません。小、中、高、特に我々は高校を持っているわけですから、中学のときの情報がある程度高校に入ってわかって、すばらしい部活動をやっているとか、あるいはボーイスカウトで頑張っているとか、何か県展ですばらしい絵で入賞されているとか、書道で活躍しているとか、音楽コンクールなんかで頑張っているとか、そういう情報なんかあって、すごいんだってねなんという話からスタートしていけば、教師と生徒の関係も、スタートにおいてもいい関係が作りやすいですね。あんまりそういうのを書いてないよね。

○上條委員 多分問題点だけが摘出されているのではないかなという気がしないでもない。

○上田知事 教師の経験者の皆さん、書いてないのですね、高校1年のときに子供たちのファイルにはそういうのはないのですね。

○古川県立学校部長 そうですね、少ないと思います。

○上田知事 あるといいね、いいことだけでも。会話がはずむよね。陸上部なんだねと、そこからでもスタートすれば話は違うかもしれませんね。

○志賀委員 居場所の話が出ていますが、やはり居場所がなぜ必要かという、親が無関心な家庭だとやはり子供は居場所をほかに、外に求めると思うのです。やはり子供と一緒に誰か何かをしてくれる大人、ちゃんと自分がぶつかることのできる、本気で考えてく

れる大人を子供は求めていると思うのです。家庭にそれがないのであれば、学校の先生方が。例えば小学校のころ、大体5、6年生ぐらいになると勉強についていけない子とか出てくると思うのです。そういったときに、本当であれば家庭で親が何か子供と一緒に学ぶ姿勢を、環境を整えてあげるとか何かしてあげること、子供はやはりそこを克服するかそういうことができるのですが、なかなかこれができない場合は学校の先生がそれをしあげて。子供は小さくても大きくても基本は同じで、自分を求めている傾向があって、そして優しさだけだとだめだと思うのです。やはりしかってくれる大人であったり、親身になって自分に向き合ってくれる大人を求めていると思うのです。先生方も今優しさだけが求められているのではなくて、そういうしかってくれる大人、そういった人が必要なのかなということを感じます。

先ほど藤崎委員からもお話があったのですが、昨日、白岡高校に行ってみまして、その先生方が、なかなか勉強が伸び悩んでいる子供たちに対し、赤点のこともありましたけれども、何がこの学校の特色ですかといったときに、規律だけはしっかりと守るように常にされていると。子供たちに規律、ある程度枠組みというものは厳しく伝える、ただ優しいだけだと子供は成長しないのだということをおっしゃっていて。確かにいろんな学校を見てきましたけれども、昨日の白岡高校は、なかなか伸び悩んでいる学校ではあるのですが、非常に子供たちが生き生きとしていて不登校が非常に少ないのですね、普通の学校よりも少ないぐらいですかね。

○上田知事 それは校長先生の方針なのですか。校長のリーダーシップですか。

○志賀委員 校長のリーダーシップであり、本当に先生方のお話を伺っていると、やはり皆さん規律についてすごく重点的にやっているとおっしゃっています。子供というのは実は反抗するけれども、しかってほしいというのも絶対あるのです。壁にぶつかってくれる大人、本来は親がそうであるべきなのですが、なかなか親が。子供は無関心でいられることが一番つらいといわれますけれども、先生にも常にこっちを向いてほしいから、子供も体当たりしていくという部分もあると思うのです。なので、秩序、ある程度の枠組みというのは先生方がしっかり子供に伝えていく、なかなかしんどいとは思いますが、その姿勢というのはとても大事なのかなということを感じています。

○上田知事 でも、実際の子供はやっかいで、私も学習塾を運営した経験があるのですが、私には貫禄負けしてちょっとひねた子供もしおらしく素直なんです、家に帰ると「くそじい」とか、「くそばばあ」とか言っているというのですね、中学3年生で。おまえ、そ

うなんだってと言ったら、そんなことはないと言う。そんなことはないと言っても親はそう言っているぞと。ともかく以前から親はなかなか子供の教育がしにくいから、だから学校というのがいつの間にかできたのですね、自然に。やはり教育係をつくったりして、帝王学を教えたりするのも、親に課題があるので厳しくしなくてはいけないところを厳しくできずに、甘えさせなければいけないところが甘えさせられずにとか、その間合いをとるのが下手くそだからよそで修業させるというか、会社の経営者の2代目、3代目の方々もあえて最初はよそに旅立たせて訓練をすとかというのと同じだと思うのですが。だから多分白岡高校で学んですごくいい感じになっている子も、家に帰ると、案外くそじいとか、くそばばあと言っているかもしれません。でもそんなことを言いながらも、親に対してはいまひとつ素直になりきれなくても、教師に対して素直になりきれれば、そこから打開策が出てくると思います。

小松教育長にお願いですが、一応今、それぞれの委員から意見が出て、非常にいいお話をさせていただきましたので、またこれをとりまとめていただいて、どんな形で制度化できるのか、ルール化できるのかもまた他のメンバーともよく相談してとりまとめていただければ。

まずは、自分たち学校側ももう逃げない、自分たちでなかなか全てを解決するのは困難だけれども、まずは自分たちが前線に立ちますよという、そういう姿勢を見せるのが非常に大事だということが何となく共通認識ではないかなと私は思っています。間違っていたらまた訂正していただければと思います。

○小松教育長 私からも一言いいですか。

門井委員がおっしゃったように、そういう学校をつくるというのもありだと思いますし、現実にそうなっているような、こういう中退の子供たちを受け入れている学校があると思います。そういう学校でやはり楽しく学習できるような環境を作ってあげなくては行かなくて、それは先生の意識の問題だけではなくて、やはり先生の数とか、それから教育方法、今、埼玉県で進めている協調学習というのは一人ひとりが必ず出番があって、そういうのはすごくいいと思いますし、あとは進度が全然違いますから、個別学習ができるようなIT環境を整備すとか、やはりそれなりの環境をつくってあげれば、レッテルを貼るという意味ではないのですけれども、困難校に対して県がちゃんと見ているよねという、学校に頑張れ頑張れ言っているだけじゃなくて、県もちゃんと支援しているよという、そういう体制をつくっていききたいなと思います。

○上田知事 これで一応学校に関しての部分は一旦切りまして、今度はですね、いわゆる家庭もなかなか難しいところですが、限られた時間の中で、家庭との連携をどうするかということについて意見の開陳をお願いしたいと思っています。なかなか難しいので、正に個別具体的な話になってくるのですが。

○門井委員 知事が言われるように、今回の東松山の事案の報告書を見ていますと、正直言って家庭に期待できるところというのが全くなくて、やはりこの報告書でいっているように、いかに子供たちの環境をすくいにとって、いち早く支援できるかというのが非常に重要なのだらうと思います。家庭がうまく機能、学校の先生とのいろんな関係とか、そういう意味で家庭がうまくいってればいいのですけれども、この事案を見ると、家庭に期待をできないと思います。私も警察官としていろんな事件を取り扱って、少年事件も取り扱いました。似たような事案をたくさん見てきています。その都度教訓を得て、いろんな対策を打ってきているのですけれども、やはり残念なことになかなか根絶できない。その現実を踏まえると、やはりいかに関係機関も含めて、早期の支援を受けるかという問題が非常にあるのだらうと思っています。その際に一番ネックになるのが個人情報で、なかなか情報が出しづらいというか、課題を関係機関同士がみんなそういうふうにならみあってしまう部分があるのかなという感じはしています。

私も現場にいて、なかなか情報を出しづらい、一般論となってしまう情報が多くなっていますので、やはり個別具体的な情報でないと効果的な対策が打てないですね。その辺をきちんと関係機関で、やはり法規は大事、これをベースにいかに情報共有していくか、また家庭の問題をきちんと把握していくかということを考える今回の報告書は非常にいい報告書だなと思っています。

○上田知事 家庭で生徒を守ることができない可能性が高いとか、家庭で生徒をうまく指導する可能性がもうあり得ないとかという断を下す割り切り方というの必要なんでしょうか。

○小松教育長 今回はそうかもしれないですね。

○上田知事 やはりこういう事例も考えなくてはいけないのでしょうか。

○上條委員 本当にいかに早い段階で、先ほど私が申し上げたように、一番最初に、学ばせるとか勉強させるから離れて、人として置かれている状況というのを知ってあげられていたかというふうに申し上げたのですけれども、正にそのことを申し上げたくて。早い段階でいかに保護してあげられるかという、もしかすると家庭から離すことがその子にとっ

ではその後の救いになる可能性もある。もちろん小さい子だったら、親と離れるということに対する抵抗感とかいろいろな問題はあってもいいけれども、その辺のところを考えると、保護施設だとか、自立支援施設みたいなものを充実させるのか、あるいは今あるものをうまく活用できるのか、そういったことを考えていかなくてはならない。

同時に、では誰がそういう情報を探してくるのか、この人はそうかもしれないと。きちんとした情報がなければ断を下せない。そのきちんとした情報というのはどうやってまとめていくのだろうということが非常に難しいのだろうなど。例えば児童相談所であったり、夜間パトロールであったり、サポステであったり、いろんなところが持っている情報というのが一通りで認識できないと判断を下せないのではないかなという気がするのです。

したがって、養育的姿勢でネットワークをつくるというのは、そこに関わってくるのかなというふうに思います。

○上田知事 一時的な虐待だとか、一時的に保護する形では児童相談所なんかで保護しているわけで、また、ちょっと親と離すべきだとか、親たる資格に欠けるとか、あるいは本人も何らかの形で切り離れたらいいというようなときに、埼玉学園なんかで小・中を併設して、そこに寮制度の中で面倒を見ているわけですが、ここはたまたま上尾の教育委員会が気をきかして、最高の教師たちを小学校も中学校も派遣してくれていまして、私が見ている限りではかなり最強レベルの人たちを派遣してくれているので、おしなべていい子が育っている。いい先生に出会い、いい寮長、寮母に暖かく迎えられているということで救われているような気がしますね。

だから問題は、ある程度この家庭では限界がありますね、だから違うところで面倒を見ないと危ないねというような、そういうどこかで線引きみたいなこともするのでしょうか。現場経験がある皆さんからちょっとお聞きしたいのですけれども、そういう線引きはするのですか。

○松本市町村支援部長 現場で小学生や中学生を見ていまして、この親ではとてもではないけれども、養育できないという場合は、校長の判断もありまして、教育委員会、首長部局の福祉部の方と相談しまして、児相の方へやはり連絡をするということがございます。

○上田知事 高校なんかではどうなんですか。

○古川県立学校部長 高校においてもそういう場合もあるのですが、しかしケースとしては、やはり生徒の方はもう義務教育を終えておりますので、そういったケースはほとんど見られません。

○藤崎委員 確かに子供を緊急避難的に、温かい食事と清潔な寝床と、そしてやはり健全な大人がいる生活する場所というのを増やしていかなければいけないのかなということも現実だと思います。先日も東松山特別支援学校の嵐山学園内教室を訪問する機会がありましたが、全体的に数が埼玉県内で足りているとはやはり思えないです。

ただ、ひとつ高校に関していえば、そういった高校に通っている子たちであれば、寮的なものをつくって、そこで寮生活を送って、高校を卒業して、自分で経済的に自立していけるような支援のあり方もあるかと思います。ひとつ入り口に、先ほど知事が最初のつかみは教師とおっしゃったのですが、今回の資料の中に不登校者数の推移というものを事務局がつけてくださいましたが、私が考えるのは、先生がほとんど家庭訪問をしていないところもあると思うのです。だからどうしたんだろうとって、先ほど上條委員の御意見の中に「摘発的なものではない」というコメントがありましたが、やはり、困っているのではないかという家庭訪問が初動でもあったほうがよかったのではないかと。親に対しても、何か困っていたら助けになりたいという、そういう教師の家庭訪問というのがやはり重要ではないかなと考えます。これが不登校という言葉でひとくくりにされますが、1回家庭訪問するだけでその家の様子が外から見て荒れているということもそこでわかりますし、またそういったつかみはやはり教師に早期発見してもらいたいなというのがある。そのあとの連携と、そしてまた連携してその子供を助けなければいけないときの、それこそ居場所というのは具体的に考えていく必要があるかなと考えます。

○上田知事 子供が変だなというときに、家庭訪問をするような余裕というのは教師にあるのでしょうか。そんなことを言っておられないというのものもあるかもしれませんが、緊急事態では。

○松本市町村支援部長 やはりあります。それをしないと子供の状況がわかりませんので、きちんと家庭訪問をして調べてくるというのはもう最低限です。

○上田知事 原則ですか。

○松本市町村支援部長 はい。

埼玉全県下そうなんですけれども、連絡もなく3日ぐらい続けて休むということですから家庭訪問するというのが小学校、中学校の原則のようになっております。ですので、かなり家庭の状況は教師が気にしているというのが現実でございます。

○上田知事 文科省の関連研究機関で、埼玉県の子供たちの40ぐらいの指標でモラルのアップ度が高いのです。9年間で3年に1回学力テストと一緒に調査しているのですけれど

も、どんどん上がってきまして、16位、7位、4位までできています。何かやはり例えばフィルタリングなんかの作業では、埼玉県が一番日本全国でやってるんです。携帯なんかのフィルタリングに関しては。

あとそういう不登校対策なんかも最も高いレベルで実施しているのです。今みたいな3日以内に行くとか、そういうところでは成功してきているようなところもあるような気がします。基本的な家庭に対するアプローチということに関しては、レアなケースで、本当に例えばどの程度、少年A、B、C、D、E、あるいは被害者などの家庭に接触できたのかということについても考えなくてはいけないかもしれませんが、ある程度家庭で十分守ることができないなというふうな判断をするようなことができたときには街全体で見守る、あるいは学校で見守るといったシグナルを出すような仕組みとこのをうまくつくれるといいですね。定例的につくれるものかどうかわかりませんが、ただ、ある程度定例的につくれるようなものも考案しないと、個人個人の判断任せではつらいですね。教師の個人的な判断だと。こういう感じの場合という線をやはり考えた方がいいかもしれませんね。そのようなところを家庭との接触についてのアプローチについてのとりまとめにさせてもらいたいと思います。

最後に、この間、「街の応援団」ができたわけでありますが、これもまた我々が強制力を持っているわけでも何でもないわけですので、街、地域による様々な活動、取組の課題と、今後県の教育委員会として地域に対するアプローチをどうするかということに関して議論を最小限のとりまとめにさせていただければ。この検証と論点を整理した上で意見を開陳いただければありがたいと思います。

○志賀委員 私は小学校の学校応援団に所属しているのですが、高校生だと若干違うかもしれませんが、小・中の学校応援団、地域の方で学校に関心を持っている方は実はすごく多いのです。それで今、放課後子供教室であったり、学校に得意なものを持っていらっしゃる地域の方たちが入り込んで、地域で見たことがあるおじさんやおばさんたちがいろいろ子供たちと向き合って、いろんなことを教えてください。そういった仕組みというのは、実は子供たちの居場所にもつながってくると思いますし、子供たちが地域に見守られて、自分は必要な存在だということを確認合おうとか、自己肯定感みたいなものが育つ、そういったこともすごく大きな影響があると思うのです。なので、やはり学校応援団の皆さんのそういう活動というのは、実は子供の意識の中では大きなものを占めているのではないかなと思っています。

ただ、高校になると、なかなかそういう何かを支援するというのは難しいかもしれませんが、私の実家の滋賀県の取組を聞いていたら、地域の高校生が地域の人と一緒にお祭りを一から十まで、計画を立てるところから人を呼び込むところから、全てを一緒になって地域の人とやっている、そういう取組のやり方もあるんだなど。こちらの方でも秩父の方でやっていらっしゃるようですが、やはり地域の方と常に何か関わることで、子供たちの自己肯定感が育っていくということもとてもいい影響力があると思います。

やはり学校からもオープンにしていかなければ入っていきにくいです。入っていきたいと思っている方はいっぱいいらっしゃるのです、地域の熱心な方々は。だけどなかなかそれが。先生方がしっかりと声掛けしていく必要があると思っています。

○上田知事 大体相当ひねた兄ちゃんたちも、よさこいだとか、大きな祭りのみこし担ぎの担い手になったりしているうちに、みんな真っ当になりますね、なぜか。みこしを担いでいるからというわけではないだろうけれども、何か違いますね。非常にいい子になっているのが目に見えてわかりますね。よさこいなんか朝霞でやっているのですけれども、ひねた兄ちゃんが来たなと思って見ていると、随分よくなったなという感じになりますね。

○上條委員 繰り返して言うようで申し訳ないのですけれども、摘発的でないというか、街が悪いやつを見つけ出して非行防止のためにどこかに連れていくぞではないけれども、そういう姿勢で対応している限りは、やはり少年たちはその街には戻らないだろうなという気がするのです。

だから地域のボランティアだとか、事業者だとか、あるいは町内会だとか、そういうような人たちが何か街の活動の中に組み込んで、活躍の場に組み込んでいくような動きの中で見守るといふことなのかなと思いますね。

先ほど説明のあった白岡高校の生徒たちが非常ににこやかで活発だった、我々に対する挨拶も行き違うたびにみんなが「こんにちは」、「こんにちは」とちゃんと言う、目の輝きがある。やはり白岡高校というのは、白岡市との間で、もともと白岡町のときに、1町1校をつくってくれとあって、町のほうが頼んでつくってもらったから町をあげて高校を応援していこうという気運があって、白岡の駅の壁画を美術部が描いたり、いろんなことに巻き込んでいるのですね。出番が多いのです。吹奏楽団がいろんなところで出前で演奏したりやっているのです。だからそういうようなことというのが生徒たちを活気づけるといふか、存在感を意識させるというようなことにつながっているのだろうなという気がしました。

だから同じようなことは、もうちょっと厳しい子たちの中にもうまくそれができれば、生き返らせることができそうだなという気はするのです。

○上田知事 後藤委員なんかも、子ども大学をはじめ、いろいろ青年会議所を通じて、地元活動というか、地域活動を考えてこられた経験の中でいかがですか。

○後藤委員 実は我々、一番巻き込むのが難しい世代が高校生とか中学生。小学生の子供たちを集めて事業をやったりイベントをやったりすると、楽しいことであれば集まってきてくれますが、高校生たちを巻き込むって本当に難しいことで、やはり彼らがそこに参加し、認められて、子供たちから感謝をされて、自分の存在価値というのを認められれば、またそういう機会でも出てきてくれるでしょうし、そういうことをいかにつくれるかということが大事なんではないかなと思っています。

ひとつ視点が違うかもしれないのですけれども、我が家の朝食のときの食卓の話題で一番多く挙がる話題というのは、我が家の片隅にごみのステーションが設置されておりまして、自治体で町内の方たちが毎朝いろんなごみを出しに来る、毎朝、みんな家族でそこに行って、今日はどういうごみが出ているか、ちゃんと分別されているかとか、変なごみが出されていないかと確認をしながら、「また今日は変なごみが出ていたよ」と下の娘なんかも言いに来たりする。

○上田知事 カラスにやられてないかも見る。

○後藤委員 そうですね、ネットをどうかけたかとかあるのですけれども、余りにも出し方がひどくて、どういう人たちがごみを出しているのだろうと、私も悔しいので防犯カメラの設置をしたのです。どういう人がごみを出しに来るか確認をすると、やはり夜中に出す人ですとか、中には大学生とか、高校生の子供たちも出しに来るというのがわかって、これは僕がそれをつるしあげてあげようとか、しかってあげようというのではなくて、ルールをちゃんと守らせるためには、同じ目線に立って教えてあげなければいけないのだろうなど、夜中、同じ時間に、そんなに暇ではないのですけれども、出しに来る方で、この時間にごみを出してはだめなんだよということをちゃんと同じ目線に立って話をしてやることが何回もありました。子供によっては「ちえっ」と言って放り投げていってしまう子もいれば、また改めて出しに来ますという子もいれば、そういったことを一つひとつ丁寧に見てあげることが大事なんでしょうし、そういう母親は、分別もできていなかったり、出す時間のルールが守れない親というのは、やはり子供もそういう親の姿を見ているということがあるでしょうから、何かしら非行に走る前に、そういう信号というのを出してい

と思うのです。ごみのルールの出し方ひとつ守れない家庭や、ゆえに子供の教育すらもまともにできない、子供をちゃんと見てあげることもできないという現実がある中で、やはりごみ出し一つかもしれませんけれども、そういったことを地域全体で関知をしながら、そういった家庭に目を配ってあげる、声をかけてあげるということをもっともってあげなければいけないのではないかな。これは決して教育に関することではなくて、生活全般の中から、未然にそういった子供たちの犯行や非行というものも防げるのではないかなというのをひしひしとごみ置き場一つで最近感じるがあります。

○藤崎委員 この中に相談体制の充実というのがありまして、私自身も不登校・引きこもりの相談をしてきたのですが、例えば警察による非行によるいじめ等の少年相談というのは、やはり専門家の見地からして、非常にアドバイスが具体的であったり、あるいは虐待に関しては兇相ですとか、もっと教師がそういった専門家の手を借りて早期に子供を助けられるような相談体制の充実というのはとても望まれるなということを実感しています。私自身も警察と連携をしているんな相談をしたりもするわけなんです、やはり得意分野というのがありまして、それをいかに相談し合うかということが子供の命を守ることにつながるのではないかと思います。

もう1点、発達障害に関しては、小さな子育てのときから親が悩んでいまして、さいたま新都心に発達障害総合支援センター、素晴らしいものができまして、見学をさせていただいたのですが、その中で1点、電話相談は行っているのですが、来所相談は今行われていない状態です。やはり子供を見てもらって話を聞いてもらえるというそういった相談というのは、ああいった素晴らしい便利なところにもありますし、積極的にそういった相談場所というのがあったほうがいいのではないかなと思ひまして、ぜひ来所相談というのを増やしていただきたいなと思ひました。やはり小さいときに育てにくい子ほど親が途中であきらめてしまう、ネグレクトになってしまう、でもちょっとしたアドバイスや安心できるような言葉掛けを相談で受けられた母親、父親は頑張ることができると思うのですが、それは正に早期発見、早期支援、早期療育だと思いますので是非。

○上田知事 でも一番最初は教師に相談される場合が多いのでしょうか。

○藤崎委員 それよりもっと小さい段階で。小学校1年生ぐらいで、学校に入ってからまた急にそれが発覚した場合に、親は学校の先生に相談すると、この学校に通えなくなってしまうのではないかとか。

○上田知事 入学以前の話。

○藤崎委員 幼稚園や保育園でうまくやっけていけないということも多々ありますので、県としてそういった相談場所というのを充実させていくのも、親御さんの助けに大いになるのではないかと思います。

○上田知事 そうするとどっちかという、教育委員会よりは県の福祉だとか、児相だとか、そういった分野になってくるね。

○藤崎委員 教育委員会と福祉の連携、そこがともに、正に連携して、いい相談場所を運営していくとそれこそ自然に情報共有もできていくのではないかなと思います。

○上田知事 そういう福祉や児童関係と教育委員会との連携というのはどんな形になるのかな。

○知久福祉部副部長 発達障害についてなんですが、今は支援する側が幼稚園、保育園であれば、幼稚園の先生、保育園の保育士さん、あるいは小学校の先生、そこと福祉の人たちが連携することが大切で、まず発達障害総合支援センターでは、その人たちへ、接し方を教えていまして、それから親との関わりが必要だということになって、新しいセンターでは親支援をできるように学ぶ講座をもう始めました。親を教育する仕方を学校の先生や保育士さんに学んでいただく、直接センターだけで受けるには限界がありますので、それぞれの現場において学んでいただくような手法、人材を育成することが大切なのかなということ今、進めております。

○上田知事 さて時間がほとんどなくなってしまいました。

大体結論を出すような話ではないのですが、既に検証と論点整理、今後の取組についての中身そのものには触れていただいているところで、そのうちの一部も議論していただいているとおりで、適宜いろいろ行われているアプローチも、それぞれ関係機関と情報が密になっているところではやはり課題が少ないのでしょうね。密になっていないところで何かが起こったときには救えないパターンになっているのでしょうね。

ただ、どこがうまくいって、どこがうまくいっていないかなんていう話を探すのも困難なんでしょう。これが難しいところでしょうね。でもできるだけそういうものを構築しているかどうかのチェックが、どんな形でできるのかわかりませんが、どこが責任を持って構築できているかどうかを調べられるかどうか。

ただ、一覧表をつくって、最小限度何かつくることは可能かもしれませんね。どの程度の定期協議ができているとか、そもそも協議会ができているとか、できているとか、そういうのは最小限度できるかもしれませんね。できていないところにはどうですかという

感じでやんわりとお願いをするとか、そういう手はあるかもしれませんね。

○小松教育長 ネットワークとか、いろんな会議は結構できているのですけれども、できてしまうと、そういう連合体ができているからいいやで終わってしまうので。

○上田知事 できたときにピークでね。

○小松教育長 そうなんです。だからそこで何をやるか、何をやって何をを目指すかということと、それぞれの連携体でちゃんと明確にさせていただくということと、あと連携の仕方自体がわかってない人たちがいるかもしれないので、先ほど発達障害総合支援センターでは人を養成しているとのことですが、学校の教員も、中高であれば生徒指導のことをわかってはいますけれども、小学校の教員はあんまりわかっていない可能性があるもので、そういった小学校の中での生徒指導担当者の育成とか、そういうこともやっていかなければいけないのかなと思います。

○上田知事 同じようなことを私も言っています。案外つくことに目的がいて、何のためにつくったか忘れてしまうということがあつたりしますので、それをチェックするような仕組みを入れておかないと、つくってほっとしてしまうというようなところがあるので。

さて時間になりました。それぞれ予定を組んでおられる方もおられますので、終了とさせていただきます。

これで結論が出るわけではありませんが、とてもいい提案をいただいておりますので、また教育長のところでとりまとめをしていただきながら、教育委員会のそれぞれの部等々に落としていただきながら、また関係の知事部局とも協議をしていただきながら、よりクリアになるところをクリアにさせていただき、また、難しいところは課題としてずっと課題なのか、それともこれは何でもかんでもやればよいというものでもありませんので、場合によっては落としてしまうとか、そういう割り切りも必要だと思います。いろんなことをやり過ぎて、いろんな方向性が出過ぎてみんな疲れてしまうというような形になりかねないもので、絞り込みも大事だと思いますので、この中でも場合によっては絞り込みをしていただき、しっかり正に教育委員会、知事部局、そしてまた警察とも、そしてまた関係の様々な機関やNPO等々にもお力添えをいただきより実効性のあることをしていきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思っております。

それでは、協議に関しては締めさせていただきます。

○小松教育長 ありがとうございます。

今日いただいた御議論をもとに、事業の検証をしたり、今後更に何をやらなければいけないかということに関係部局とも相談しながらやっていきたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

○上田知事 よろしく申し上げます。ありがとうございました。

閉 会